「霞客徐先生墓志銘」訳

一　序―陳函輝が墓誌銘を記すことになった経緯

墓志とは、墓に入った人の事を記すものである。霞客先生は、私と堅い友情で結ばれていた人で、その人柄は「雅やか」「善良」「自由気まま」であった。一生のうちに経めぐっところは、星に届く山岳に手をかけてよじ登ったり、遙か辺境の地を踏み歩く、といったものであった。そして今は、道山（仙人の棲む山）に遊んでいるのだろう。天帝の住まいに遊んでいるのだろう。はたまた雲気にのって飄々と八方極遠の地に遊んでいるのだろう。いわゆる、鳳凰が高く千仞の上に飛翔しながらも、なお決断できずに「人間社会に留まろうか」と言っているようなものか。

そうではあるが、墓に墓誌銘を記すのは古くからの礼であり、なされるべきことである。先に先生が、汗を流しながら漫遊されていた時は、同志である我々は、夸父が太陽の後を追っていって、遂に旅先で死んでしまったのと同じく、先生が帰郷して故郷に埋葬されることがないのではないか、と恐れていた。それが今、先生は身を守って天寿を全うし、その肉体を先祖の墓に寄せようとされている。そこで先生の修道者としての気質や凡俗を超越した才能について、きちんと正しく後世に教えることになれば、先生の生涯の親への孝行と大いなる節度、剛直厳正な古人を思わせる心、及び傑出した優れた文章とが、ともに乗り物に乗せられたように世界に伝わっていき、将来の人々に対してもそのすばらしさを輝かすことがきっとできるであろう。

思うに、先生の平生の交友である、陳継儒・陳仁錫・繆昌期らの諸君子たちは、みな先生に先んじて天上に昇られてしまった。黄道周先生は、このところ監獄に繋がれてしまっている。その中で、先生の兄の徐仲昭が墓志と墓銘とを下して、私に文章を書くように命じられた。これはまた、世間のことを知らない小物の鳩が、偉大な鳳凰を賦にして歌うような、恐れ多いことである。しかし、私と先生との交わりは、とても久しいものがあるので、道義として辞退するわけにはいかないだろう。

二　徐霞客の家系

謹んで先生の行状を述べる。

先生は諱を弘祖、字を振之といい、霞客は号である。他に黄道周がつけた霞逸という号もあるが、世間ではもっぱら陳継儒がつけた霞客の名が流布している。

その先祖は、おそらく「南州高士」と称された、後漢の隠者の徐穉の血を引くものであろう。北宋時代に開封府の知事を勤めた徐鋼という人がいて、宋室の南渡とともに江南に移り住んだ。これが第一世。その子孫たちは、常州・松江・蘇州といった地方に分散して居を定めた。

徐鋼から五代目の徐千十一に至って、始めて住まいを江陰の梧塍里に移した。そして子孫ともども、元王朝には仕官しないことを誓った。

明朝に入ると、徐本中が、すぐれた人材であることから、お上に徴されて四川の賊を降伏させる使者に立った。本中の子の徐景南は、飢饉に際して粟を拠出して民を助けた。ともに国家からの命令という栄誉を受け、天子のお褒めに預かったのである。

徐景南の子が一庵公徐頤である。徐頤は、古代文字に習熟しており、

中書舎人に任ぜられた。弟の解元荊門州太守の徐泰とともに、才能名声によって役人としての名声を輝かせた。

徐頤の子が、梓庭公徐元献である。元献の子が西塢公の徐経である。この父子は科挙の試験において、優秀な成績をおさめた。

徐経の子が、雲岐公徐洽である。官は鴻臚簿に至った。

徐洽の子が、柴石公の徐衍芳である。官は光録丞に至った。これらの伝記については、すべて家譜として現在に至るまで伝わっているものである。

そして徐衍芳の子が、豫庵公徐有勉である。とりもなおさず霞客の父君である。

三　霞客の誕生と幼少期・青年期

豫庵の夫人である王氏は、霞客をはらんで十ヶ月で、不思議な夢とともに霞客を生んだ。生まれたとき体は大きく眉はめでたく、かしらは峯のように隆起し、緑の瞳がきらきらと輝いていた。一日中眠ることなく、彼を見た人はもう仙道を学ぶ人であるなと見なした。

子どものころ、家を出て塾で学んだが、口を開いて言葉を述べればそれがそのまま詩編となり、筆を取って文字を書けばそれがそのまま文章となるのであった。それでいて親の旁らにいるときは甘え慕った。これは彼の天性のものである。

そのうえ特に「奇書」を好み、古今の歴史書・地理書・山海経図のたぐいをほしいままに博覧し、あらゆる仙人や隠士の足跡に思いを馳せた。それらの書籍を、常にこっそりと経書の下に隠し、深く読み味わい、こころに喜んでいた。ただ両親の期待に違うのをおそれて学問を続けたのであって、文房具に向かい、科挙の試験に応ずることは、彼の本心ではなかった。

かつて「陶水監伝」を読むと、すぐに笑いながらこう言った、「ここでは松風くらいが聞く価値がある程度だ。青空を見上げ、太陽に手を掛けて登るようなことだって、どうして遠いといえようか」と。

厳忌の「州は九つあり、その八つを渡り歩いた。岳は五つあり、その四つに登った」という言葉を見ると、またもや掌を撫でながら、こう言った、「大丈夫たるもの、朝に大海原にいたら暮れには蒼梧にいるべきである。世界の一部に自分を限定する必要があろうか」と。その話の誇大さを怪しむ人がいても、泰然として顧みなかった。むしろ益々古人の逸事を渉猟し、神仙達の蔵書に到るまで読まないものはなかった。

酒や詩歌を好む人に遇うと、親戚や古なじみとともに往来交際し、酒と詩作を楽しんで、ともすれば夜明けに達したのだった。

そしたまた、朝に夕にとやさしくおだやかで、小さな事でも必ず謹み、口を出ることばはすべて忠孝に符合するものだった。父親を敬い母親を慕い、贅沢のたぐいなどは心を正しく保って絶対に行わなかった。それは後漢の隠者梁鴻が、子どもの頃決して他人の世話にならなかったことを、彷彿させるものであった。

四　父有勉の遭難、母の後押しで旅遊に出ること

童子の年を越えるころ、父の豫庵が盗賊に襲われ、別荘で重傷を負った。霞客は裸足で駆けつけ、看病すること年を越えた。しかし豫庵はなくなり、霞客は悲しみの余りやせ衰えてしまった。村人は幼いながらも孝であると称賛した。力を葬儀に尽くしているうちに、外寇がたびたび

あり、そこから世間の変化無常を感じ、いよいよ世俗から遠ざかるようになった。

霞客は、名山大川の奇勝を訪ねたいと思っていたが、母親が存命で、お世話をして孝行を尽くさなければならないと考えて、出遊を願い出ることはなかった。しかし、母親の王夫人は、彼を励ましてこう言った。「天下四方を志すのは、男子として立派なことです。ほかでもない「論語」に「(親が存命中の)出遊は必ず一定の場所にせよ」とあります(親が存命中の出遊そのものを禁じているのではありません)。距離を調べ、かかる時間を計り、往復があらかじめ予定していたものとあまり変わらない、ということさえできるのであれば、どうして我が子に、「籠の雉」や「門につながれた馬」のような、拘束される苦しみを味あわせることができるでしょうか」と。そして霞客のために「遠遊冠」を作り、彼の出遊の心を励ました。かくして霞客は、口バに騎り、わらじを履いて、幽山を探索し険岳を渡り歩き、我が身を天下中にさらし、これ以後轍を止めることはなかった。

五　崇禎五年の旅遊の回顧

壬申(一六三二)秋のことである。天台雁宕への三度目の旅遊を契機とし、霞客は仲昭兄とともに、私を小寒山に訪ねてくれた。灯火をともして夜話をし、その半生の旅行の軌跡を語ってくれた。

自ら次のように語った。

「万暦丁未の年(一六〇七)、初めて太湖に舟を浮かべ、東西の洞庭山に登り、あたりを眺めた。また呉王闔閭が遇ったという、霊威丈人の遺跡を訪ねた。

これ以後、山東河北の地を歴遊し、泰山に登り、孔子廟に拝謁し、孟母三遷の古里を訪ね、嶧山で枯桐を弔った。これは己酉の年(一六〇九)である。

さらに南に行って普陀山観音霊場に渡り、彼の地を遍歴し、天台山華頂峯の八千丈の頂に登り、雁宕山では東の方の大・小龍湫の滝を眺め、さらに石門と縉雲山に及んだ。これは癸丑の年(一六一三)のことである。

甲乙の間(一六一四～一五)、私はこう考えた、『我が家は江蘇にある、どうして近隣の四郡を訪ねないでよいだろうか。南京は六朝時代には都がおかれて栄えていたし、本朝では洪武帝が首都としていたところである。二十四橋に懸かる明月、三十六曲の河川など、どうして手を拱いて見過ごしてよいであろうか』と。(かくして南京などの近郊を経めぐった)。

丙申の年(一六一六)の旅遊は、また遠出となった。春の初めには、黄山・白岳山への遊行をなし、夏には武夷山の九曲渓に入った。秋には五泄山・蘭亭にもどり、禹陵の窆石を見た。その後、西湖に一ヶ月ばかり船を浮かべた。

丁巳の年(一六一七)は、旅遊をせず、自宅に居た。

また善権・張公らの洞窟に入り、湖南省の九華山に登り、江西省の廬山の五老峯を望んだのは、戊午の年(一六一八)であった。

魚龍洞に至り、銭塘江の潮流を観察しながら溯り、江郎山・九鯉湖に至って帰ったのは、庚申の年(一六二〇)であった。

辛酉(一六二一)・壬戌(一六二二)の二年間は、嵩山・華山・武当山を遊歴し、東海を遙かに眺め、下って瀟水湘水を遡った。中国全土を俯瞰し、九つの烟がたちのぼることが、掌の中に見えるかのようであっ

た。

この間に出会った人々では、廬山の慧燈禅師・終南山の道士・太華山の道士などは、俗塵を全く感じさせない風貌であり、今でも目の中に微かに見えている」と。

六　旅遊と母への孝養

私は彼の言葉を聞いて、天の河すら極めてしまうのではないか、と思った。そこで問うた、「先生は旅遊に厭きたのではないですか」と。すると答えるには「まだまだです。国内についてみても私が訪ねたところは、まだ辺境を極めつくしたとは言えません。広西や雲南が私を待っています。四川峨眉山への旅遊も、奢崇明が乱を起こしたため、早々に陝西を経由して帰ってきたもので、私の本意では無かったのです。これからはるか崑侖などの僻遠の地を訪ねなければならないのです」と。

仲昭はそこで私にこう言った、「私の弟は、生まれつきとても親孝行で、遊行に行くたびに、母親の長寿建康のために、様々な霊草・香草などを採取して来る。また各地方の風土の異なること、信じられないような神奇なことや神怪のすみか、崖や谷・石段などの見聞してきたことどもを、話すのであった。聞いた人々は、口をぽかんと開けたり、驚いて冷や汗を流したりするが、母は却っておもしろがるのであった」と。

徐霞客は、母親が高齢なので、遠遊は差し控えるという戒めを受けようと願い出た。すると王夫人は、「そのことは以前あなたと話しているでしょう。私ならまだ健康です。今は自分のことを優先させなさい」と言った。そして王夫人自身が、江蘇の荊溪・句曲を旅遊し、霞客にお供をさせた。行程では、王夫人の方が霞客よりも先に立って歩いたのであった。人々は笑いながら「景勝を求める素質は血筋なのだなあ」と言うのであった。

七　母八十の寿と逝去

天啓甲子（一六二四）、母の王夫人は八十歳となった。そこで陳継儒が長寿を言祝ぐ序文を書き、張苓石が「秋圃晨機図」を描いた。李維禎先生がその画に序を付けた。時に三老は皆七十歳以上であった。名公たちの題詠が、幾んど海内すべてから寄せられた。霞客はそれらを悉く石碑に刻して保存した。今伝わっている「晴山堂帖」がこれである。

この年、霞客は再び旅遊に出かけた。華山の麓の青柯坪に至って、ふと胸騒ぎがした。急いで帰宅の準備を整えて馳せ帰ったところ、母は既に病を得ていた。翌乙丑（一六二五）の春から秋にかけて、つきっきりで看病し、衣を解く暇もなかった。母が食事をしないと、霞客も食事をしなかった。そこで母は無理をして食事を取ったりした。しかし、ついに天寿を全うして亡くなった。霞客は日夜子どものように泣き続けたが、母を祭る文章を、董其昌や陳仁錫に依頼した。よろよろと這うようにして歩き、悲しみを抱いて依頼に行ったのであった。母の病が重篤なときは、我が身に代えてくださいと天に頼み、また天下にひろく名薬を求めた。その篤い孝行ぶりは、枚挙に暇がないほどである。我が身を責めること、ほとんど自らの生命を削るほどであった。

八　霞客の旅遊の特色

喪が明けると、嘆息して言った、「昔の人は、母親が存命の間は、我が身を他人に捧げることはできない、とした。いまや私は、我が身を山

水に捧げてはいけないだろうか。いや最早それは許されるはずだ」と。かくして父母の墓に再拝して辞去し、距離も時間も限りを設けず、旅先での宿泊、野宿すら行って、自由に旅遊をした。

彼の旅遊には、他の人とは異なるところがあった。数尺の長さの鉄の棒を持って道を作り、どんな険しいところも切り開いて行った。霜露をものともせずに野宿し、数日の飢餓も耐え、食べられる時には何時でも何でも食べ、野猿や野の精霊とも夜をともにし、旅装で一枚の袷を持っただけで、寒暑に耐えることができた。中でも最も「奇」なることは、天から与えられた健脚ぶりであり、輿や馬に乗ることはしなかった。あるときは竹林が繁茂する険しい崖で、百里あまりの距離があったが、（一日歩いて）夜の崖の下の枯れ木のところへ着くと、たいまつを掲げて、細かい事柄もいちいち記録するのであった。誰か人に出会い、ともに某州の某地の奇勝を語り合うや、すぐにそこへ出かけて行った。そして数ヶ月立つと帰ってきて、語り合った人を訪ね、その地で見ていなかった事柄について一一数えたてて報告するのであった。

九　「信心独往」な霞客の旅遊

あるとき席上で、「君は以前、一度雁宕山の山頂に行ったことがありますよね」と霞客に聞いたところ、彼は何か心に思うところがある様子だった。翌日、まだ空が明けないうちに、彼は旅支度をして、私を訪ねてきて、「これから雁宕山を再訪します。帰ったら、きっとあなたに報告しますよ」と言うのであった。十日程過ぎて霞客は帰ってきてこう言った、「間道を取り、蔓を伝いながら登ってきました。龍湫の滝から三十里登ると、洞窟がありました。雁が宿るところです。さらに石ごろごろの道を登ること十数里で、正徳年間に白雲・雲外僧侶が結んでいた草の庵に出ました。それはまだ健在でした。さらに二十里ばかりで、山頂に到達しました。強風が吹き荒れていました。夜中には宿の廻りを数百等の鹿が取り巻いていました。三泊して下山しました」と。思い立ったらすぐに行動すること、このようであった。

仲昭が笑いながら言うのであった、「そんなわずかな距離くらい、霞客にとってはなんでもない。北京へ行ったときのことを述べれば、陳仁錫と、崆峒山の広成子の住まいの事を話している内に、そこからは北辺の塞外の地を見渡すことができることに話題が及んだ。すると霞客は三日間の食料だけを用意して出かけていってしまった。戻ってくると、仁錫に彼がまだ見ていないことを伝えるのであった。その数日後、満族が北京近郊を侵したのだった。

その翌年、福建へ行き、服喪中の黄道周を彼の故郷に訪ねようとした。さらにあるひとから預かった手紙を持って広東へ至り、羅浮山に登って手紙を渡し、山中の梅の木を携えて帰ってきたのであった。

さらにその翌年には、黄道周を追って、雲陽への途上に及んだ。そして私が西陵にいることを思い出し、曹娥江を経由して四明山に登った。五日後に、赤い蘭の花を手土産にして、私を訪ね、山中の石の窓のような奇勝について語るのであった。

我が弟が、心の赴くままに一人で出かけ、何も妨げるものがないこと、そして軽々しい約束や承諾をせず、有言実行であること、このようである」と。

十　西南への大旅遊

（一）旅行の目的―黄河長江、三大山脈を究める

霞客は神秘主義的な考えを好まなかった。天下をあまねく遊歴して、星々の通り道や地気の廻り方において、それらの淵源と交わる様について通暁していた。そしてこう言った、「昔の人達が、天文や地理について記述しているものは、往々にして前書の引き写しやこじつけである。長江黄河の二大河川と三本の大山脈は、文献の記載以来、中国という一部についてのものしか書かれておらず、その広大な全体像は明らかにされていない」と。かくして崑崙山の外、中国海外への旅遊をなさんとした。そして後漢の隠者である向子平の言葉を継いで、こう言った、「たとえ私が死んだとしても、（家長としての義務は果たしているので）我が家にとって迷惑をかけることは無い」と。

（二）旅立ちと静聞の遭難

崇禎丙子（一六三六）九月、江蘇の外にいた私に一通の手紙を寄こし、離別を告げてきた。そこにはただ「西南地方を旅しようと思います。故郷にはいつ帰ってこられるかは分かりません。もし見知らぬ国からの手紙が届いたら、それは私が遠い異境の地で書いたものです」と書いてあった。

そして仲昭が福建から帰るのを待って、手を取って一別し、大いに笑いながら出発したのであった。同行者は、僧侶一人と従僕一人である。僧侶は静聞といい、破寺で修行中の身であった。そして徐霞客が旅遊に出ると聞いて喜んで同行を申し出たものであったが、長旅がどれほどのものになるのかをよく分かっていなかった者であった。出発して、浙江・江西・湖南あたりは、かつて訪れたことがあるところであった。ところが湖南の湘江で強盗に襲われ、荷物を全部盗まれてしまった。静聞は凶刃に斃れ、霞客はやっと命だけを免れた。皆は霞客に「ようやく助かった命であり、旅遊をやめた方が良い」と言った。しかし霞客はこう答えた、「私は鍬を一本担いで来ている。どこで死んでも構いはしない」と。かくして同郷の知人から旅費を借りた。そして静聞の遺骸を背負って、洞庭湖に浮かび、南岳衡山に登り、七十二峯・十洞・十五巖・三十八泉・二十五溪の名勝を窮めたのであった。

（三）四川・貴州・雲南の遊

「以前の四川への旅遊は、十分ではなかった」と考えた。そこで四川に入って峨眉山に登り、北に進んで岷山まで至って、四川の西北部を極め尽くした。

また南に下って、大渡河を渡り、黎州・雅州あたりの瓦屋山や晒経山などの諸山に至った。さらにまた金沙江を調査し、塞外の地に野牛を探し求めた。金沙江から南へ瀾滄江に浮かび、また北へ行って盤江を探尋した。おおむね多くは西南夷の領域にあった。そして貴州・雲南の名勝もほとんど極め尽くした。

麗江土知府の木阿宅阿寺は、徐霞客が至ると聞いて、自ら門を出て出迎えたが、その礼は極めて恭しかった。彼の道行きに先回りして、羅川あたりの蕃族たちは、箒をはいて道を清め、蒙化の土知府も武器を背負って先導した。そのもてなしぶりは、列子が飲物屋から飲物を優先的に贈られたのにも劣らないものであった。しかし、霞客はそうしたもてなしを受け入れることなく立ち去り、食事の世話などにはならなかった。当時の雲南黔国公であった沐天波も霞客を客礼で待遇した。霞客が不思

議な形をした木や蟠った根っこを持っていると聞くと、それを見たいといい、更には二十両あまりの金で買い取りたいと申し出た。霞客は笑って、「ほかでもない、趙の璧玉でもあるまいし、私自身が気に入っているだけなのです。どうして十五の城市もの価値があるでしょうか」と言った。黔国公は、益々霞客を高く評価した。

点蒼山・鶏足山に憩い、僧侶を礼拝して、静聞の遺骨を迦葉道場に埋葬した。閃中儼太史が、静聞の墓塔の銘文を作った。

（四）塞外への遊

鶏足山から西へ向かい、石門関を出ること数千里で、崑崙山に至り、星宿海を眺めた。山の半ばに登ると、風が強く吹いていて、衣が脱げそうなほどであった。さらに遠くの黄金の宝塔を望見するに、さらに数千里の遙か彼方であった。そこで遂に発願してチベットを旅し、大宝法王にお目にかかった。鳴沙山より外側は、どこも灼熱の砂漠で、須弥山や無熱悩池といった名勝などは、由旬の距離があって、尽くすことはできなかった。

西域志によれば、砂漠が遙か彼方まで広がっており、人馬の骨が積み重なっているのを道しるべとする。化け物や熱風を避けることはできない、と。ここぞ、玄奘三蔵法師が諸々の魔物達を折伏させたところで、そのことは玄奘の記録に詳しく記されている。

霞客が、飛ぶ鳥が空を駆けるようにしてここに至ったことには、大いなる因縁があるのではないか。霞客が西遊した時は、既に現世を虚無なものと見ていた。それが仏土に至ったからには、仏門に帰依する心が生じたであろう。

ところがたまたまある書物を読んで、楊黼先生のことを知った。楊黼は五華山に隠居していて、性理の学に専心していた。それがある日、法王に帰依しようとして、一心に修行に打ち込んでいた。ある人に出会った。その人は「法王はすでに南に行かれました。その衣はこれこれの色の女物で、男性用の履き物を履いています」と。言い終わると姿が見えなくなった。そこで楊黼はあまねく探し求めたが、遂に見つけ出すことができなかった。しかたなく家に帰ることにした。帰宅すると、彼の母親が門を叩く音を聞きつけて、父親の履き物をつっかけて出迎えた。その衣服の色は、先に聞いた色と同じであった。かくして（儒教の、親に孝行するという教えこそ、仏教の教えに他ならないと）覚った楊黼は、母親に叩頭して仏礼を行った。そして孔孟の教えで村人を教化したのであった。

この話を読んで、霞客は嘆息して言った、「儒仏道の三教は、結局のところ儒教の五倫の教えを離れないものなのだ。私の親の墓は江陰にある。今や故郷に帰ろう」と。

十一　黄河長江と三大龍脈の概要

霞客は、峨眉山の手間から手紙を一通、私に寄こした。はるか異域からの出されたものである。また銭謙益にも一通送っていて、一緒に私に託された。それらの書簡の中では、歴渉した山川の形勝や岩石の様子などを書き記していた。

またあわせて、黄河と長江について論じていた。

「長江は岷山から始まるのではなく、黄河も天まで遡るわけではない。源は、黄河は崑崙山の北で、長江は崑崙山の南である。中国で黄河に支

流が注いでいる省は五つ（陝西・山西・河南・山東・南直隷）、長江に支流が注いでいる省は十一ある（陝西・四川・河南・湖広・南直隷、雲南・貴州・江西・広東・福建・浙江）。長江に注ぐ水量は、黄河の倍である」と。

また三大龍脈を論じている。

「北龍は黄河を北からはさみ、南龍は長江を南からはさむ。中龍は河江の真ん中で区切っているが、やや短い。北龍からは南向きの支脈が中国に入ってきているだけだが、南龍は気勢盛んに中国の半ばを占める。いずれの脈も崑崙山から発しているのだが、（南龍は）金沙江と並びながら南下し、滇池を環って五嶺に達している。龍が長いと言うことは、源から遠いということであり、脈の長さも長いということだ。長江が黄河より大きいというのはこのことからも分かるだろう」と。

かくしてこのことを「遡江起源」一篇にまとめた。私の友人の李瑞木［字は令哲、江陰県の県令］と私とで、霞客の「遡江起源」を「江陰県志」「靖江県志」の二つの方志に刻入し、桑欽「水経」・酈道元「水経注」の誤謬を正そうと思う。

十二　郷里への帰還と晩年

霞客は旅遊を終え、滇南に戻ってきた。その地で足に病を発し、遊行できなくなった。そこで留まって「鶏足山志」を撰述した。「志」は三ヶ月でできあがった。麗江太守の沐黔國公は、彼のために輿轎をあつらえて、送らせた。百五十日の間、輿轎にゆられてきたが、湖南省に至って病が重くなった。すると黄岡侯大令が船をあつらえてくれ、六日間で長江の下流に達し、ついに生還することができた。これは崇禎十三年の夏のことである。霞客は家に帰ると、客人を迎えるでもなく、奇石をベッドの前に置いてそれを撫でたり眺めたりして、家産のことは気にかけなかった。

ただ、長男の徐屺にはこう語った、「私は霊境を遍く遍歴したが、やや心に思うことがあり、『生は仮の宿りであり、死は帰ることである』ことが理解できた。自然のままに遊び、心にわだかまりをもたないのがよいのだ。ただ、旧友にもう一度会えないかというのが心残りだ」と。そこで徐屺を派遣して、とらわれの身である黄道周を見舞わせた。徐屺が帰り、黄道周の現状を報告すると、霞客は腰掛けに寄りかかり、ため息をついて言った、「人の寿命は定めがある。この欠陥だらけの世界では、荊の道や曲がりくねった難路を進む（官吏としてまっとうな生き方をすること）価値があろうか」と。重篤に陥る数日前にも、徐屺を寄こして私を馬渚に訪ねさせ、「寒山よ、火のしまつに気をつけなさい」と書いて寄こした。その情を交わすこと篤く、また落ち着いて静かで、決して乱れないこと、このようであった。

十三　墓誌銘依頼の経緯と、霞客の奇人ぶり

先生が逝去された三日後、仲昭が私に手紙を寄こした。それには「霞客がついにあの世に旅立ちました。臨終の時、墓誌銘を小寒山に托し、あなたがそれを不朽のものにすることを願っています、と言いました」と書いてあった。

私思うに、霞客はその旅遊によって重んぜられることはなかったが、千古の遊人とも言うべき人だ。これ以後の遊人たちは、かならず霞客を重んずることになるだろう。

彼の天真爛漫さといえば、東方朔が霊芝の生えた草地で神馬の手綱を引きながら、家に帰るとお母さんの衣にすがったのと同じよう。

彼の親孝行ぶりといえば、曾参の母親が指を噛んだとき、遠方にいた曾参がそれを感じ取ったものと同じよう。

彼のどこへでも一人で出かける様といえば、孔巣父が頭をふってこの地に留まろうとしないのと同じよう。

彼の奇を好む耽溺ぶりといえば、李白が元丹丘を訪ねたり、夢で天姥山に登ったことや、杜甫が木皮嶺の諸山の景勝地を経由して住まいを定めたのと同じよう。

彼の高義を追求し、約束を必ず守ることといえば、卓契順が恵州にいる蘇軾への書簡を帯同したり、郭仲仁が担安の遺骨を背負ったのと同じよう。

そしてその狷介な性格の赴くところは、往々にして古来の賢人や友人達とは相容れないところがあった。

仲昭はまた、こうも言っていた、「彼の旅遊にはさらにふたつの『奇』があった」と。

霞客は性として「奇書」を好んだ。自分が未見の書物を客人が持っていると、すぐさま財布を空っぽにしてでも買い取った。足りなければ衣服を売ってまでして代金を用意して手に入れ、自宅へ持ち帰った。そうした「奇書」が箱や棚にいっぱいで、宮廷の書庫に比すほどであった。

また性として「奇人」を好んだ。身分の高い役人は必ず避けて交わろうとせず、多くの人が集まる都市は駆け足で走り抜けた。気持ちのあうものがいれば、すぐさま訪問して、名刺を投じ、堂にあがりこんで語りあい、意気投合した。

送別の言葉は受け取るが、贈りものをされるとそれは拒み、もう二度とその人を訪ねることはしなかった。

十四　友人らが評する霞客の徳性と言動

故郷の友人達が霞客について語ったことによれば、彼の旅遊だけが立派だったわけではない。生涯親に仕えて孝行だったことは、彼らが記した志伝や図賛に見えている。兄にも父に仕えるように仕え、老年に至っても仲睦まじかった。弟たちも、均等に遺産を受け、遺言で差をつけることはなかった。

また先祖を追尊すること手厚かった。仲昭と協力して、先祖の遺文を記録して、出版したりした。また先祖の肖像画をきれいにして装丁し、時々に礼拝した。先代の墓石が雨ざらしになっていると、瓦葺きの建物でそれを被った。一族を引き連れて先祖のお祭りをしては、「母の教えですから」と言うのであった。親族への対応は、「義」にあうことは率先して行い、孤児を援助した。不作の歳は、いつも食糧を拠出して飢えた人々を救い、私財をなげうって橋を修理したり、古い建築物を復興したりした。

たまたま君山に行ったとき、張宗璉の祠が瓦礫の中に埋もれているのを見つけた　そこでそこを掘らせたところ、楊士奇が碑文を書いた石碑を得た。すぐさま資材を集めて祠を再建し、石碑を作り直した。郡のひとびとは、義挙であるとして彼を褒め称えた。

［「江陰志」にいう、「張君廟は、君山の西の麓にある。宣徳七年（一四三二）の創建。本府の同治であった張宗璉を祭ったものである。彼の功績人徳は、楊士奇の『廟碑記』に詳しい。この廟はのちに廃れた。弘治十一年（一四九八）に知県である黄傅が、天妃宮を改築して張公廟とな

し、季節ごとにお祭りをした。しかしこれもしばらくして廃れた。天啓四年（一六二四）に至り、この地の人である徐宏祖が、私財を出して再建した。董其昌に依頼して、周文襄公が揮毫していた楊士奇の碑文を、改めて書かせた。大学士である周延孺が以上を記す」。〕

琴瑟の弦を取り替えれば音は同じなように、何度か再婚したが、子どもたちは衣服もきちんと整えられて、分け隔てをされることはなかった。三人の子どもは成人したが、異腹であっても、異なった育てられ方をされることはなかった。同じ地所に住まい、家計の費用なども応分に負担するという奇特な子ども達であった。これも霞客が均しく十分に支援をし、細かいことにこだわる必要がないようにさせたからであった。

十五．霞客の著述

霞客は詩や古文に秀でていたが、とりわけ遊記に長けていた。文震孟・黄道周両先生などは、その遊記をとても興味をもって賛美していたが、霞客自身は書架にしまっていて、人に見せたがらなかった。今その書をひもといてみると、世界内外のあらゆる事が書かれており、さながら、司馬相如の著した「封禅書」のようである。仲昭が校訂をしているが、遊記をきちんと校訂するのは、私の生涯のもう一つの仕事である。

十六　墓志の結び

霞客は万暦丙戌（一五八六）年に生まれ、崇禎辛巳（一六四一）に没した。卒年は五十六歳であった。壬午（一六四二）春三月九日、馬湾の新墓に埋葬した。

小寒山陳某が銘を作った。

十七　銘

銘にいう、
龍とともに遊んだり、鴻とともに飛翔したり。
太陽を追いかけたり、風に乗って空を飛んだり。
世界の外を極め尽くして、国内をくまなく踏破し、いまは仙人の宮殿（墓地）に休息されている。
馬湾には、りっぱなたてがみのような、（霞客先生の）高徳の心が聳え立っている。
いまや先生は天上に遊ばれており、ひとびとはそこをすばらしい都市だという。
ああ、その学識人徳は、人並みはずれてすばらしいものであったことよ。

（陳函輝「霞客先生墓志銘」了）

訳注：薄井俊二、二〇一四年三月三十一日
加筆修正：薄井俊二、二〇二三年六月二日